

東方財団録

たんぽぽ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に財団のとある機動部隊の一人が迷い込む話。

この小説はCC BY-SA 3.0に基づきます。

・? SCP Foundation [http://www.sc
p|wiki.net/](http://www.sc
p|wiki.net/)

・? SCP財団 <http://ja.scp|wiki.net/>

目次

幻想入り	1
”ヒト”	12
”幻想郷” とは何ぞや？	23

幻想入り

霧が濃く、少し先もはっきり見えないような場所で一人歩く人影があった。

全体的に黒い服装で、肩に特徴的なシンボルが描かれている。ブーツにヘルメット、関節部に当てられたプロテクター、それに手に持っている自動小銃が、人影がどういった人間であるかを示していた。

頻りにチェストリグに付けている無線機を操作しながら歩いていたが、少しするとそれをやめ、自動小銃を構えて歩き出した。

その後周囲を警戒しながら進んで行く人影とは別に、大きな影が現れる。カチ、カチと硬質なもの同士が打ち付けられる音を発しながら、その影は人影に近づいて行く。

そのまま両者の距離が縮まっていき…そして激突した。

発射口から漏れ出るマズルフラッシュにより、激突地点は弾丸が発射されると同時に明るく照らされる。薬室から弾き出された真鍮製の薬莢が、その光を受けて煤けた光を反射をしていた。

人影と相對しているのは、巨大な蜘蛛の様な生き物であった。八本生えている脚の先は刃物のように鋭く、高所から人影に向けて何度も振り下ろしている。落ちていた小石が両断され、回避行動をとった人影は小石と同じ憂き目を見ずに済んだ。

8つの目が人影を捉え、脚を振り下ろす。だがその刃が届く前に、大きな影が倒れる方が先だった。辺りには体液が飛び散り、打ち合わせて音を鳴らしていた鋏角も穴だらけになっており、見る影もなかった。

弾倉内の弾薬を撃ち切ったのか、引き金は軽い金属音を響かせるだけで、雷管を打ち付けることは無い。熱を持った銃身を通って、とめどなく銃口から硝煙がゆらゆらと揺蕩ているのが、激しい戦いであった事を物語っていた。

続いでる襲来を警戒して弾倉を交換している時、霧が薄なついでく。幸運にも、霧が掛かった場所からの脱出を果たしたのだろう。そして、人影の容貌が明らかになる。

青年だった。人影の正体はごく普通の、そこらに居そうな青年であつた。顔色は悪く、どこにでも居そうな日本人的な面構えである。そんな彼の目に入ったのは、一面の赤色であつた。そしてそれは、群生した一種類の植生から成り立っていた。

——彼岸花、そう呼ばれる植物によつて、この景色は形作られていた。

彼は思わずといった様子で膝を着き、一輪の花を摘み取つた。暫くそのまま静止していたが、再び立ち上がるとまた歩き出した。先程よりもしつかりとした足取りで。

彼岸花が徐々に疎らになり、同時に遠くの方に森林が見えてくるようになる。森林に向けて歩いていく彼は、そこで声を掛けられた。

「もし、その人?」

ピタリ、と動きが止まる。彼はゆっくり首を回し、声を発した人物を探す。そして森の前に何者かが立っていることに気付いた。

「…なんだ?」

「あなた人間?なんでこんな所に居るの?」

「…ここがどこか分からない」

「ここは里から離れている筈だけど…」

声を掛けた人物は、灰色のコートを着た少女だった。左肩には赤色の前掛けの様なものが掛けられている。「変ね…」と言いつつ首を傾げる。それに合わせて黒髪で編まれた三つ編みのお下げが、大きな遍路笠の下で揺れていた。

体は小さく、身長は彼の胸辺りまでしかない。

「…君は?」

「私は矢田寺成美。魔法使いよ」

魔法使い。その単語が聞こえるや否や、彼は腰に引つ提げていた何かの機械を矢田寺に向けた。

「魔法使い、か。普通の人間とは違うのか?」

「私は人間じゃないわよ?元々地蔵だし」

それより、と彼女は続けた。

「名前を教えてください?」

機械のモニターに表示された数値を見て安心したように息を吐くと、彼は名前を名乗った。

「デルタだ」

「変な名前ね」

「気にするな…それより、元々地藏とはどういう事だ？」

「どうもこうも、文字通りだけど？」

「…そうか」

怪訝そうな顔をする矢田寺に、彼はそれ以上食い下がるのをやめた。

「じゃあほら、ついてきなさい」

「どこに行く気だ？」

「里よ。なんでこんな所に居るのは知らないけど、里から出て来たんじゃないの？」

「里…まあいい、案内してくれ」

「任せなさい！」

里という単語を聞いて少しばかり考え込む様子を見せた彼だったが、結局矢田寺に同行することを決めたようだ。

矢田寺が先導する形で二人は歩みを進めていく。少しばかり歩くと、歩きながら矢田寺がデルタの方を向いた。

「それにしても良かったわね。妖怪や妖精とは会わなくて。会ってたら…妖精は分からないけど。今こうして私と歩いてないだろうし」

「妖怪、妖精？そんなものが？」

デルタの表情筋が引くつく。彼の脳裏にはメスのアカギツネと土着存在が過ぎっていた。

「…？沢山いるじゃない」

「…よく里とやらは滅ばないで存在してるな」

「博麗の巫女が居るからでしょ。あと退治屋とか」

「博麗の巫女…？」

矢田寺は足を止めると、振り返った。

「…あなた、本当に里の人間？」

「最初から肯定はしていないが」

「なら、外の人間ね…安心しなさい。里には連れて行ってあげる」
「随分と親切だな」

「まあね、これでも地蔵ですから。妖精以外には親切にしてるつもりよ?」

そこまで言うのと、矢田寺は再び歩き出した。置いてかれまいとデルタも続いて歩き出す。

「でも珍しいわね。外の人間なんて」

「そもそも、ここはどこだ?」

「ここは魔法の森よ」

「魔法の森…?」

「ここまだ少ないから大丈夫だけど、キノコの胞子には気を付けてね。下手したら死ぬから」

「肝に銘じておく」

デルタはその後もここがどこか尋ねたが、ここは魔法の森と呼ばれる場所である。という事しか分からなかった。

「それにしても、変わった格好してるわね」

「そうか」

「この膝とか肘に付いてるのなに?」

「プロテクターだ」

「ぶろてくたー?」

「…鎧だ」

「こんなの?」

矢田寺が歩く速度を落として、デルタと並び歩く形になる。そして肘に付いているプロテクターをコンコンとつき始めた。

「何この感触…初めて触るわ。この頭のも、初めて見るわ」

「ヘルメットだ」

「兜とは少し違うわね」

「兜…?それとは時代が違うからな」

「へえ」

適当な返事を返す矢田寺だが、急に後ろを振り向く。

「不味いわね…低級の妖怪につけられてるわ」

「妖怪?」

「そう、妖怪」

この場に居たのが矢田寺だけであつたら、なんの問題もなかっただろう。だが、ただの人間を守りながらとなると、些か不安が残った。

矢田寺にデルタを見捨てるという選択肢は最初から無かつた。なんせ彼女は元々地藏であり、衆生を救済するという役割を自分に課していたからだ。但し妖精は除く。

「その妖怪ってのはどんなやつだ?」

「私達を追っている妖怪は妖力的に低級だから、動物から妖怪になつて間も無い妖怪だと思うわ。妖獣ってのが正しいかもね」

「妖怪ってのは感染するの?!」

「え?そんなことはないわよ」

何か勘違いしたデルタが動揺したような声を上げたのを好機と見たのか、藪から黒い狼のような妖怪が三匹飛び出してきた。

それを見た矢田寺が魔法を展開しようとした時、至近距離で爆音が響いた。

「きゃあ!」

横殴りの爆音に鼓膜を殴られ、悲鳴を挙げてしまった矢田寺を後目に、デルタは爆音の演奏を――発砲を続けた。排出された薬莖に触れてしまった矢田寺が再び悲鳴を挙げる。

指切り射撃による正確な弾丸の投射は、一匹の妖怪の頭蓋を貫いた。続けて二匹目の妖怪も何発か胸に直撃するも勢いそのまま駆け続ける。だが、続けて飛来した弾丸に頭蓋を砕かれた。そして最後の一匹は接近に成功し、跳躍してデルタに飛び掛った。

引き金は引かれっぱなしになり、空中で妖怪を多数の弾丸が貫いた。その内の一発が筋肉と肋骨の隙間を縫って心臓を穿つ。

デルタが回避行動をとると、彼が先ほどまでいた場所に妖怪の骸が粘着質な音を立てて落下した。

「ちよちよちよつとー煩いわよ!事前になさいよ!しかも熱いのよ!なにこれ!?真鍮の筒?ってアツツ!」

鈍い光を放つ薬莖を拾おうとしてしまった矢田寺が、三度目の悲鳴

を挙げる。

「…すまない」

至近距離で警告も無しに発砲をしたのは悪かったと思ったのか、弾倉を入れ替えながらデルタは謝罪をする。

「もう！私が優しくして良かったね！普通だったら許されないよ！普通の人間だったらね！」

「助かる」

「さっさと行くわよ！また妖怪に絡まれたらたまったもんじゃないし！」

矢田寺が怒りながら足早に歩き始め、それに慌てたようにデルタがついていく。

「ていうか今の何？魔法じゃなさそうだし、あんた人間でしょ？妖術も使えないだろうし、霊力ってやつ？」

「…自動小銃だ」

「銃？鉄砲の事かしら…それにしても私が知っているのとは全然違うわね…」

矢田寺は怪訝そうな顔をしたが「まあいっか」と言うのと、追求をそこでやめた。外の人間がまた新しく何か開発したのだろうと独りでに納得したからだ。

「妖怪ってのはどういう存在なんだ？」

「うーん、妖怪によって違うから一概には言えないわ」

「なぜ妖怪と呼ばれているんだ？妖精とは違うのか？」

「あ！妖力を持っていたら妖怪じゃないかしら。妖精は純粋な生命力の塊だからね。妖怪とは違うわ。なんせ、私が少し力を出したら簡単に…ふっ」

「…妖力ってのはなんだ？」

妖精に対する矢田寺の態度に空恐ろしいものを感じたデルタは、妖怪について聞くことにした。

「なんだと言われてもね…妖力は妖力よ。説明のしようがないわ」

「そうか。それにしても、妖怪とやらは普通の生き物と同じ様に、心臓を破壊されたら死ぬようだな」

「まあ低級の妖怪だからね。力の強い妖怪だと、心臓を破壊して首を落とさないと死なないやつも居るらしいわ」

「…そうか」

矢田寺の話から、妖怪と一口に言っても様々な種類があるのだろうとデルタは予想した。

”魔法使いだと思わされていた少女が居た”

■

「それで妖精を暇潰しにー」

「…あれは？」

「ありや、もう着いちやったか」

矢田寺の話に相槌を打ちつつ歩いていたデルタの目に入ったのは大規模な町であった。

「じゃあ私の案内はここまで。また話そうね！魔法の森で待ってるぞー！」

そう言うと、矢田寺は去っていった。一人残されたデルタは、町へと歩いていく。

町の外縁部には槍を持った二人の人間が歩いており、デルタは歩哨だろうと当たりをつける。そしてその内の一人がデルタに気付くと槍を構えながら彼へと近付いて行った。

「…何者だ？」

「ここに迷い込んだ者だ」

「外来人か…どうやってここまで来た？」

「矢田寺という魔法使いに案内された」

「魔法使い…ふむ、まあいい。ついてこい」

残っていた一人が町に走っていった。そして少し経つと、武器を持った5人ほどの男を歩哨が連れてきた。

デルタは5人の男に囲まれながら、里と呼ばれる町に連行されて行った。そこには江戸時代後期のような街並みが広がっていた。時

代錯誤なそれに、デルタが驚きの表情を見せる

「こつちだ」

5人の男のうち、一人の男がついてこいと顎で示した。

「妙な真似はするなよ」

「分かっている」

会話はそれだけだった。

無言のまま歩き続け、ある建物の前で男の一人が止まった。

そして、建物に向かって大声で人を呼んだ。

「もし！上白沢殿！居るならば出てきて欲しい！」

少しばかり待つと、ドアが開いた。

出てきたのはまだ少女に見える女性であった。青色のメッシュが入った長い銀髪、奇妙な帽子が目を引く。

「なんだ？」

「急に訪ねて申し訳ない、上白沢殿。用件なのだが…外来人だ」

「外来人…ああ、後ろのやつか。お勤めご苦労、置いてつていいぞ」

「はっ！」

男達は小走りで走り去って行った。それはまるで、ここから一刻も早く離れたいという様子であった。

「その外来人、上がるといい。お茶くらいなら出せるぞ」

そんな彼等を胡乱げな目で見送った後、少女はデルタを手招きして建物へと入っていった。

■

「さて」

机の上でお茶が入った湯呑みが二つ湯気を立てている。目の前の少女がお茶を淹れている間、デルタは周囲を観察していたが、この建物が伝統的な日本家屋に即した設計のものであるということしか分からなかった。

目立った異常性は見受けられない。

「君はどこから来て、どんな職業に就いていた？」

「言えないな」

「…それは困るな。素性も明かせない者をこの里に置いておく訳には

「いかない」

里の外から流入する人間の事を外来人と呼んでおり、この少女はその選別をしているのだらうとデルタは予想した。

「守秘義務がある」

「それは何故だ？」

「それこそ言えないな」

「…外来人と言えど、妖怪の餌にするのは良心が痛む。正直に言ってくれないか？」

「勘弁してくれ」

少女の恫喝交じりの言葉をなんら脅威に思っていないのか、デルタはどこ吹く風であった。

「ではここにどうやって来た？」

「分からない。俺が聞きたいくらいだ」

「霧と彼岸花を見たか？」

「ああ、それは見たな」

少女は顎に手を当てて少々考え込む様子を見せた。小さく「無縁塚か…」と呟いた後、氣遣うような表情を浮かべた。

「…友人や、親しい者は居るか？」

「少ないが居る」

「本当に？」

「嘘をつく理由がないだらう」

「霧が濃い場所に気が付くと居なかったか？」

「…何故だ？」

デルタの何故という言葉を正しく理解した少女は、目を逸らしながらこう言った。

「そこは無縁塚。人に忘れ去られたものが辿り着く場所だ」

「人に忘れ去られたもの…？」

「人に忘れ去られた物、者がそこには現れる」

そう言われたデルタは、少し考えこんだ。そして何かを堪えるような、悲壮感を感じさせる表情で少女に向き直った。

「…本当か？」

声は震えていた。

「本当だ」

「そうか…そうか…！…そうか！…そうか」

興奮したように少々大きな声を出したかと思うと、直ぐに萎んだ声になる。それは疑問が氷解したような、自身を納得させているような声色だった。

「信じよう。では、何から聞きたい？」

「随分と素直になったな」

「守秘義務はもうない」

「…君はどこから来た？」

「アメリカ合衆国インディアナ州」

「あめりか…？まあいい、職業は？」

「機動部隊員」

「どんな職業だ？」

「部署にもよるが、自分は様々な任務に駆り出される部隊だった」

「具体的には？」

「アノマリーを確保したり、サイトの警備やら要注意団体との抗争だったり、本当に色々だ」

「…悪いが、どんな仕事なのか余り理解出来ない」

「…そうだな、兵士みたいなものだ」

多大な語弊を含む喩えだったが、この場においてデルタは分かりやすさを優先させた。

「年齢は？」

「忘れた。成人はしている…と思う」

「忘れた…？」

「ちよつと特殊な環境でな。誕生日すら分からないんだ」

長年人を見ていた慧音から見て、彼が嘘をついてるようには見えなかった。

ひたすらに疲れ果てたような心境だけが伝わってきた。風船が破裂したように、先程までの余裕を欠片もなくし、代わりに自棄の雰囲気のみが彼を包んでいた。

「そうか…少しの間は私が預かってやるから、その間に里で職を見つけてなさい」

「…お世話になります」

嘘はついてない。そして悪人という訳でもなさそうだと判断した慧音は、暫く彼の面倒を見る事にした。恐らくは直ぐに自分の手を離れるだろうから、といった予想もその判断の一因となった。

「そうだ、まだ名前を聞いていなかったな」

「俺はデルターーいや、○○だ」

「私は上白沢慧音。慧音でいい。宜しく、○○」

”コードネームはもう終わりだ。何故なら既に意味が無い”

”ヒト”

「○○先生！ここがちよっと分からなくて…」

「これか、これはこうしてー」

「あ！分かった！ありがとう○○先生！」

あれから○○は就職活動の傍らで慧音の下で教鞭を執っていた。

職が見つかるまでとはいえ、穀潰しになるわけにはいかない。そんな風に出ることを探していた彼にとって、慧音からの教師としての仕事の手伝いを申し出されたのは渡りに船であった。

彼が最初に連れてこられた施設は慧音が運営する、寺子屋というこの里における教育機関であったのだ。

授業の資料を纏め、授業を行い、小試験の答え合わせをする。○○は決して無能でも無教養でも無かった。資料は慣れた様子で纏めており、授業は慧音の授業より眠くないと好評であった。

「○○は教師の経験があるのか？」

「いや、全く」

余りにも上手くやっている事から、授業が終わったある日に慧音が○○に尋ねた。

「前の職場で報告書を死ぬほど書かされたし、それを纏めて提出しなければいけないかった。新しく部隊に入った人間を指導したこともある。…今思えば教師に似たような事の経験をしていたな」

「そうか。…なら、いつそここで教師として働くか？」

「有難い提案だが、そろそろ職が決まりそうなんだ」

「…残念だ」

「それでもう職は見つかったのか？」

「ああ、決まった。道具屋で働く事にした。中間管理職を務めた事があるからか、歓迎されたよ」

「そうか…」

二人は夕食を載せた机を囲みながら他愛のない話をしていた。今日の夕食は慧音が作ったものだ。川魚の焼き魚に、味噌汁、白米といった料理が湯気を立てて鎮座している。

「…〇〇、道具屋の仕事が始まって、私の手伝いをしてくれないか？してくれるなら、引き続きここに住んでいてもいい」

「本当か？助かる」

「自分のような者のための貸家の家賃は高いからな」そう言って〇〇は焼き魚を解体していく。

「そ、そうか。私はそうだったことには疎いからな。知らなかった」

「…」

〇〇は疑問に思っていた。それは慧音に対する里の人間の対応についてだ。彼女は子供達に懐かれているし、大人は重んじるような様子を見せている。

だが後者は慧音に対して余所余所しい…というより、対面するのを可能な限り避けているように思えるのだ。里の人間が彼女と談笑をしているのを見た事が無いし、交わす言葉はどれも事務的だ。

彼女は頭が良い。教養もある、同時に人格者である。これは同じ屋根の下で生活しているから、〇〇には身に染みて理解出来ていた。だからこそこの里での教育機関である寺子屋を任されているのだろう。だが、それ以外の知識――特に里の生活に関する知識が少なからず欠如してるのだ。

「なあ、慧音。なにか隠している事はないか？」

「いきなりどうしたんだ？隠し事なんてなにもないさ。なにも…」

〇〇はどこか歯切れの悪い慧音の返答に、引つ掛かりを覚えた。

”この小さな違和感は、肉のカルトによる未完の儀式を想起させる

”

「いや〜〇〇くん、助かるよ。商いの規模を拡大していて、事務方の仕事が出来る人間が少なかつたんだ。今から育てようにも、時間が掛かるからね」

「帳簿の書き方はこれでいいですか？」

「ああ、完璧だ。元々は事務職をしたのかい？」

「いや、そういうわけではないが…始末書とかを書いていくうちに、色々教えられて…今思えばなんで俺が事務処理してたんだよ…」

どうやら彼が属していた組織は、人材不足が深刻であったようだ。本来ならば自分が処理する筈ではない仕事を押し付けられていたことに、今頃になって抗議をしたい気持ちが湧いてきているようだ。

「とにかく良かった！これで憂いが減ったよ！」

「これからも頑張らせて頂きますよ。…とところでご主人、寺子屋を知っていますか？」

「知ってるも何も…そこで私は学を学んだんだ」

なにを当たり前の事を。そう言いたげな表情を浮かべて道具屋の主人は返答した。

「いやなに、自分はそこで手伝いもしているもんで。こういった評価なのか気になったんですよ」

「…上白沢先生は良い人だよ。間違いなく。里に長年貢献してきてくれた」

「長年？どう見ても彼女は少女に見えますが…」

「女性に歳を尋ねるものじゃないよ、○○くん。君は若いからよく分からないと思うけどね」

「いえ、そういうことではなく…」

「…ほら！次はこれを頼むよ」

「…了解しました」

道具屋の主人公に話題を逸らされたが、○○は大人しく引き下がった。これ以上食い下がったところで、有意義な情報は得られない上に、不要な摩擦が生じるだけだと判断したからだ。

「上白沢様のことか…？あの方は昔から里に貢献してきてくれた方だ、里の守護者だよ。どう思っているかって？勿論尊敬しているよ」

その後も○○は情報を集めていたが、聞いた話の殆どがこういう内容であった。あの少女にしか見えない同居人は、どうやら○○が想像していたよりも遥かに長い年月を生きているらしい。茶菓子屋の老

人は、幼少期に彼女の下で学んだと語っていた。

異常性はハッキリとしていた。そして彼女がそれを話したからな
いということも。

彼女が一体何者なのか、どういう存在なのか、情報収集に努めても
里の人間にはぐらかされてしまう。その途中で慧音に対する印象が、
親切な同居人から警戒すべきアノマリーへと変わっていった。

異常性ははつきりしている。だが口裏を合わせたように、誰もそれ
を話したがない。何者かに口止めされているのか、なんらかの異常
性による影響なのか、検討がつかなかった。この一見平穏に見える均
衡状態を悪戯に刺激するのは、取り返しのつかない事態を招くだろ
う。○○はそう考え、これを一旦保留する事にした。

” 例えそれが一見人畜無害に見えていても、その実そうではない場
合があると熊の人形が教えてくれた”

「ただいま」

「おかえりなさい」

表面上は何も変わらないやり取りだったが、片方の内心は穏やかで
はなかった。それが顕れたのか、慧音はにこやかにしていたが、○○
の表情は心做しか固いものであった。

○○から見てこの里は：いいや、目の前の人物は警戒すべきアノ
マリーだと認識していた。彼女は少なくとも”ヒト”ではない。人
型の”ナニカ”である。

ここでは何かが薄皮の向こう側で蠢いてる。そんな予想をしてし
まう程度には、彼は目の前の少女について把握出来ていなかった。
専門の機動部隊ホであれば、もっと上手く情報を収集することが出来る
のだろうなど、○○は無い物ねだりに思いを馳せていた。

「部屋は余っているからな」

寂しげな表情でそう言った慧音が○○に貸している部屋で、彼は里
で購入した着物のような普段着から、ここに来た時に着ていた黒い服
に着替えていた。完全武装である。

そして胸ポケットから吸入器を取りだした。これには休眠状態の知覚レベルを活性化させる、認知増強剤が入っている。

手の中でそれを弄びながら、○○は違和感のあるこの里について考えていた。

”自分の認知が歪んでいるのか、この場所自体に何かがあるのか”
分からない。分からないが、この違和感は決して捨て置いて良いものではない。そう判断した彼は、手に持っていた吸入器を使用した。

：○○の視界には特に変化はなかった。壁に立て掛けていた自動小銃を手に取り、周囲を警戒する。歩き慣れた廊下を進み、慧音が居る居間まで進む。

そして、障子を開けた。

「どうしたんだ、そんな格好で…」

彼が想定していた最悪の事態は起こらなかった。障子の音に慧音は振り返り、いつものように声を掛けてくる。明日の授業の準備をしていたのか、教材が机に並べられていた。

「いやなに、久しぶりに着てみようと思ってな」

「そうか…」

そう言うと、慧音は机の上の教材に向き直った。

それを見届けた○○は、外に出るために玄関に向かう。

「そろそろ夜になるから、出掛けるとしても早めに帰るんだぞ？」

「ああ、そうだな」

○○の背中に向かって、慧音が忠告する。そういえば彼女は少々堅苦しい人物であつたなど、彼は再認識した。

町並みにも異変は無かった。

分かったことはただ一つ、○○が懸念していた事柄がここで起こっていないか、という事だけであつた。

少し安心すると同時に、自分が知らない未知の何かが関わっているのではないか、という疑惑が○○の中で浮上した。同居人の異常性に

については、未だに仔細が明らかになっていないからだ。

そもそもここがどこだか○○は未だに分かっていないのだ。里での情報収集の成果は芳しくない。

そこで彼は里の外に出る事にした。

完全武装しているのだから、ちようどいいだろうと思ったのだ。

里の外縁部に辿り着いた○○は、ちようど近くを歩いていた歩哨に声を掛ける。

「ちよつといいか？」

「お前は…寺子屋の」

里の外に出たいという旨を伝えると、驚く程あっさりと通る事が出来た。一応の警告はされたが、それも妖怪に対するものであった。

恐らくこれは○○が道具屋で働き始めており、尚且つ寺子屋で手伝いをしている事が大きいだろう。この里で、彼は信用というものを得ることが出来たようだ。

「どこに行くんだ？」

「ああ、少し森に…」

里を出た○○に話し掛ける人物が居た。てつきり歩哨かと思った○○だったが、それにしても妙に声が高い。それはまるで、少女のような…。

「…どつしてハハハ？」

声の主は少女というより、慧音であった。振り返った○○の視界には不機嫌そうな表情を浮かべた同居人がそこには立っていた。隅には眉間に皺を寄せた歩哨が。慧音は歩哨を一瞥すると、○○に向かって歩き出した。

「それはこつちのセリフだ。早く帰るように言っただろう。それがどうして里の外に出ることに繋がるんだ」

「ちよつと知り合いに会いに行こうと思つてな」

「…いいから今日は帰るように。もう夜だ。妖怪の餌食になるぞ？」

慧音は○○の手を掴み、強引に里に連れ帰ろうとする。○○は抵抗しようとしたが、予想以上に、いや…異常な程の力で抵抗を許されなかった。この細腕のどこにこれ程の力があるのか。振りほどこうに

も、まるで鋼鉄製の拘束具のようで不可能であった。

自身の腕を掴む白魚のような指を見つつ、彼はまた慧音の異常性を目の当たりにした。

「全く、里の外は危険だというのに…夜なら尚更だ」

彼女の明らかになっっている異常性は、普通の人間では考えられない寿命と、強力な膂力の二つである。後者に関しては単純明快であるが、前者に関してはそもそも寿命が本当に長いかすら分からない。他者の肉体を乗り物にする存在を○○は知っていた。そもそも、彼女は”ヒト”なのか？それは解剖でもしなければ分からないし、専門知識の無い○○には判断する事も不可能である。機材も無い。

そこまで考えたところで、彼は小さくため息をついた。慧音には聞こえなかったようで、追求は無かった。

「…まだ晩飯は食べてないな？作っておいたから、一緒に食べよう」

家に到着してもまだ、慧音は手を掴んでいた。

「そろそろ手を離して貰ってもいいか？」

「もう里の外に出ようとするんじゃないぞ」

「分かった、分かった」

○○をジト目で見詰めると、慧音は手を離した。それは手の掛かる子供を世話しているような雰囲気であった。

「全く…外人だからと言って、妖怪に対する警戒心が足りていないのは問題だぞ。容易に命に関わる問題だ」

「妖怪は夜になるとなにか変わるのか？」

「ふむ、まだ話していなかったか？力が増したりするし、人間は夜目が効かないが、効く妖怪は多い。それに、満月の夜にでもなれば…」

「満月の夜？」

「あ…ああ、そうだ。妖怪は満月の夜になると普通の夜よりも力が増すものが多い」

「本当にそれだけか？」

「…それだけだ。とにかく！夜に里から出ないこと。夜でなくても、不用意に里から出ないこと。分かったか？」

「分かった。気を付ける」

〇〇は何故か慧音が満月の夜について言及した時に言葉に詰まったのを見て、何かあるのではないかと訝しんだ。だが直ぐに強引に話を断ち切られてしまった。ここまで露骨にされると、彼はこの里における情報収集の限界を痛感させられることとなった。

翌朝、今日は道具屋の仕事が非番であった為に、彼はまた完全武装で里の外縁部まで来ていた。

「やあ、昨日ぶりだな」

「昨日は直ぐに戻ってきたな。今日は保護者は居ないのか？」

からかい混じりの歩哨の言葉に、苦笑いを浮かべながら彼は里を離れる。まだ日が高いし、この時間であれば慧音は寺子屋で授業をしている。そこまで考えて彼は、魔法の森へと足を進めた。

「しかし…よくもまあ、一緒に住めるものだ」

小さく呟かれた歩哨の言葉は、〇〇には届かなかった。

意気揚々と魔法の森の前へと来たのはいいが、そこで〇〇は立ち往生していた。森に無策で入っても、遭難するのが目に見えていたからだ。森の中に道と呼べるような道は無く、もし矢田寺の案内もなければ彼は里に辿り着くことすら出来ていなかっただろう。

そこで彼は自動小銃を空へ向け――。

「うるっさいわね！」

その少し後に魔法の森の中から自称魔法使いが飛び出して来たのを見て、彼は笑みを浮かべていた。

「待ってたぞ」

「もっと他の方法は無かったの!？」

「…あるか?」

「いや普通に呼び掛けるとか」

「それで聴こえるか？」

「聴こえるわよ！まったく…」

「それでなんの為に私を呼び出したの？」

「少し聞きたいことがあってな…森で話せるか？」

里の方を気にしながら、○○は提案する。里に近いこの場所だと不意に里の人間に妨害されるかもしれない、という恐れがあったからだ。

「…しようがないわねえ。ついてきなさい」

なんだかんだ言って話し相手に飢えている矢田寺である。久しぶりに話せる相手に会えて、気が緩んでいた。

「ああ、そうだ」

「ん？」

「お前に教えた”デルタ”って名前、コードネームだから忘れてくれ。本当の名前は○○だ」

「コードネーム？」

「偽名だ」

「あんた、どこまで人をコケにしたら…！」

「お前は人じゃなくて魔法使いだろ？」

「そうだけど…って、ああもう！」

”本当にこの人間といると調子が狂う！”と内心憤慨しながらも、矢田寺は素直に○○を森の奥へと誘って行った。

「魔法を見せてもらってもいいか？」

「魔法が見たいの？いいわよ。この先で見せてあげる」

森の入り口から随分と歩いた場所で、ふと思いついたかのように○○は矢田寺に声を掛けた。

魔法使いと名乗っているのだから、魔法を使えるのだろう。○○がそこまで考えたところで、彼女がどういった魔法を使えるのか、対処するにはどうしたらいいのかと考えるのは至極当然の事であった。

森の中を歩き続けていると、開けた場所に出た。真ん中には小さな小屋が建っている。脇には切株を利用したであろうベンチが設置してあった。てつきり野宿していると思っただけ驚いた表情をしてい

た○○に、矢田寺は「ここが自分の家よ」と自慢げに言った。

何らかの機械を向けてくる○○を横目に、矢田寺は様々な魔法を披露した。少女に見えても長い時を生きているだけあって、魔法のレパートリーは多彩であった。同時に色々と質問を投げ掛けてくる○○に丁寧な答えを返していた。

「…これで満足？」

「ああ、ありがとう」

「てかそれなに？」

「カント計数機だ」

魔法を見た人間は漏れなく驚愕の表情を浮かべていたが、どうやら○○はそうではないらしい。矢田寺は少し意外に思っていた。

「魔法を見て驚かないの？」

「似たものを既に知ってる」

怪訝な表情を浮かべる矢田寺に「もつと理不尽なものをな」と○○は続けた。

「実は今日お前を呼んだのは魔法を見る為じゃない」

「じゃあなんのためよ」

○○は周りを気にする素振りを見せた後、口を開いた。

「里について聞きに来た」

「里…？ああ、人里のことね。何が聞きたいの？」

「人里についてどれだけ知っている？」

「どれだけって…住んでるあんたよりかはきつと少ないわよ？」

「そうか。では上白沢慧音、という人間を知っているか？」

「上白沢…たしか、人里の守護者とか言われてる…」

「ああそうだ。だが彼女にはおかしい点が有る」

「おかしい点？」

「老人が子供の頃から、彼女は少女の姿だったんだ」

「それが？」

そんなことはなんてことない、といった様子で返す矢田寺に○○は

眉を顰めた。そんな○○を横目に矢田寺は言葉を続ける。

「里の守護者って言われてるくらいだし：驚くことかしら？」

「：いや、普通の人間だったらおかしいだろう」

「なら人間じゃないのかもね」

「人間じゃない、か」

「別に珍しい事じゃないと思うけど」

「わたしも元地蔵の魔法使いだしねー」そう言って矢田寺はベンチに座る。そして隣を手で叩くと、○○に顔を向けた。

「座りなよ」

矢田寺に誘われるがままに、ベンチに座った○○の頭の中を”人間じゃない”という言葉が反芻する。そして同時に”珍しくない事じゃない”という言葉も彼の心にざわめきを生んでいた。

ここは、異常だ。隣に座っている存在は人間の少女にしか見えないが、本人の言う所では人間ではない。彼女の口振りからするに、ここはそんなものが大量に存在する場所だ。異常存在の坩堝なのだ。

その事實は、○○の平常心をどうしようもなく刺激した。そもそもだ。

人里と呼ばれる場所にいる実体が”ヒト”である証拠は無い。

”幻想郷”とは何ぞや？

考えても答えは出なかった。

財団が誇る人材も、機材もないこの状況で、○○に出来ることなどたかが知れている。

「まあ、人里にいる時点で妖怪ではないと思うけどね」

「何故だ？珍しくないんじゃないのか？」

「いや、博麗の巫女がそんなの許すわけないわ…」

「博麗の巫女…」

「あり、博麗の巫女を知らない？」

「妖怪退治を生業としている存在、としか」

「そうそう、あの悪魔みたいなの…」

○○は里で生活している中で、博麗の巫女というものがどういった存在であるかは大雑把ではあるが把握していた。慧音の素性とは対照的である。

「博麗の巫女ってのは、妖怪と見たら無差別に退治していくの。それはもう凶暴で凶暴で…」

「…そうか」

どうやら妖怪から見た博麗の巫女と、人里から見た博麗の巫女では大きな隔たりがあるらしい。

目の前の魔法使いの話とは真逆で、博麗の巫女は人里ではかなり人氣があった。妖怪を倒せるのは彼女の専売特許のようなものであったからだろう。人里にも退治屋という妖怪退治の専門職はいるが、博麗の巫女には到底かなわないようだ。

そして、博麗の巫女というものが人里を護っているとも。慧音も里の守護者と呼ばれているが、その違いはなんだろうか。

「…慧音と博麗の巫女の違いはなんだ？」

ふと。過ぎった疑問がそのまま○○の口から飛び出して来た。

「知らないわよ」

そしてその疑問は矢田寺に一刀両断された。

「まあ、それもそうか」

そもそも矢田寺は人里から見たら部外者である。これだけ聞き出せただけでも、収穫と言えるだろう。

「里の周辺を探索したいんだが、一人だと余りにも心許ない。だからついてきてくれないか？」

”話は変わるが”と前置きをした〇〇が、目を瞑って何やらブツブツと念仏のような言葉を呟き出した矢田寺に尋ねた。(後で尋ねたところ、確かに念仏だったようだ)

〇〇はここがどこか隔絶された場所である事は分かるが、妖怪と呼ばれる敵対的な実体によって里からの遠征行為は自殺行為になると聞いていた。これは〇〇自身実感していた。矢田寺と初めて遭遇するまでに一回、矢田寺と歩いていて一回、里に辿り着くまでに合わせて二回妖怪と遭遇しているのだ。

だが調査を止める訳にはいかない。ここがどこかも分からない状況で、現状に甘えるようなことは彼の恐怖心が許さなかった。

しかし調査を進めようにも敵対実体に対処する為の弾薬は無限では無い。補給も見込めない。ということでは彼は友好的に見える矢田寺を利用しようとしていた。今回彼女を訪ねた理由の一つに、それがあつた。

「え、嫌よ。なんであんたの都合で連れ回されなきゃいけないのよ」「だよな」

最初から期待はしていなかった。そんな様子の〇〇を、ぱちくりと大きな目を開けた矢田寺が、呆れたような顔で見ている。

「バカな人間ねえ…里でずっと暮らしていればいいじゃないの」

「ああ、そうかもしれない」

「ならどうしてさ。ーーーもしかして外の世界に帰りたいのかい？」

「いいや、そんなことはない」

「じゃあ、何がしたいんだい？」

残りの人生を里で暮らす事を受け入れつつ、外の世界に帰ることも

拒絶する。だが里の外に出たがる。矢田寺は隣に座っている男の考えていることが分からなかった。心做しか悪かった顔色が更に悪くなっているように見える。

「それは冒険心ってやつか？」

「いいや、恐怖心だ」

もしかして、といった感じで矢田寺が投げ掛けた言葉は、予想外の言葉によって応えられた。恐怖心が原因なら、それなら尚のこと里に引きこもっていた方が都合が良いではないか。

「どういうこと？」

「…逆に聞くが、未知の存在に囲まれていて平気なのか？残念ながら、いつ全てが崩壊するかもしれない状況で、座して待てるほどに俺は強くない」

「心配要らないと思うけどね…」

「本当にそうだと思うか？」

その一言と同時に、隣に座っていた人間の雰囲気が変わった事を矢田寺は肌で感じた。言葉に表せないような圧力のようなものが掛けられたように、隣の間人を意識せざるを得なくなった。

そして誘導された視界で、○○が悲哀と諦観の混じったような表情を浮かべていたのを見て、感じていた圧迫感が消失した。そこで一体自分は何に怯えていたのか…と考えて、矢田寺は初めて自分が怯えていた事に気が付いた。

…一体何に？

「うえ？なんのこと？」

「…いいや、忘れてくれ」

そう言うと、○○は破顔した。

余りにも呆気なく霧散した圧迫感に、体がついていけないのか、矢田寺の心拍数は未だに高いままだった、

「さて、そろそろ帰るとするか。情報感謝する」

「あ、うん」

そう言って立ち上がった○○がひらひらと後ろ手に手のひらを振りながら、森へと歩いていく。

そして、途中で止まった。

「なあー」

まだなにかあるのか。矢田寺は無意識に身構えていた。

「帰り道、教えてくれ」

矢田寺はベンチから転げ落ちた。

矢田寺の呆れたような視線を背中に受けつつも、里へと帰ってきた○○。魔法使いとの会話で得られた収穫と言えば、博麗の巫女の対応から、慧音が妖怪である可能性が低いということ。 ”魔法使い” という存在が○○の知っているものとは違うこと。ここで言う魔法使いの ”魔法” の原理が分からないことが分かったということ。

それらを彼はメモに書き留めていた。

彼が今日得られた情報をメモに書き終わり、寺子屋に帰るために歩いてると、里の中にある小さい池の畔で何やら座って考え込んでいる様子の男女の子供が二人いた。見慣れた子供だったからか、○○はつい声を掛けていた。

「どうした？…こんな所で…」

「あつ、○○先生…」

二人は○○に気付くと、立ち上がって駆け寄った。

「先生、聞きたいことがあるんですけど…」

「なんだ？」

「山彦のことです」

「山彦…？」

山彦。それは山や谷の斜面にて反響した音が返ってくる現象を指す単語である。

「それがどうした？」

「前に山に行った時に、何回も言葉が帰ってきたから、山彦が何匹も居るんじゃないかって怖くなって…」

どうやらこういう事らしい。この二人は最近山に登る機会があつ

たらしく、そこで両親に言われて大声を出した。そしてそのまま声が返ってきた事に酷く驚いたらしい。それも複数回。

「山彦は生き物じゃないぞ?」

「え?」

「山や谷での音の反響による現象…分かりやすい物理現象だ」

「で、でも、妖怪の仕業だって父さんが…」

呆れたような表情で、○○は二人を見た。

「…課外授業を始めるか」

「げ」「うわ」

「そう身構えるな、簡単な事しか言わない」

○○の課外授業はそれから暫く続いた。

「…じゃあ山彦は自然現象で、妖怪の仕業じゃないんだね!」

「当たり前だ」

「父さんに教えてくるー!」

「転ぶなよー」

二人の子供は家へと駆けて行く。

それを見る○○はひと仕事終えた、といった様子であった。

「随分と熱心に教えていたな」

そんな彼に話し掛ける人物が居た。その声は少女特有の高い声で、

しかし落ち着きのある声色であった。

「ん?…慧音か」

「まったく、探したぞ。里のどこにも居ないのだから…どこへ行っていた?」

「いやなに、少し里の外に出ただけだ」

「危険だといっただろう。…まったく、何度も言っても分からないのか?」

慧音は腕を組みながら、呆れたような声色と表情で言い放った。

それに対し、○○は目を見据えて演説のような言葉を吐き出す。

「この場所について知る為に…」

「何が」危険に見合った価値があると信じている」だ。そんなもの、どこにもありはしない」

呆れたような雰囲気は継続しながら、長つたらしい○○の言い訳を慧音はバツサリと切り捨てた。

「なぜ言い切れる」

「…この場所について知りたければ、鈴奈庵にでも行つて幻想郷縁起でも借りてくればいいだろう」

あつさりと解決策を提示された○○は、一瞬動揺した。だが、すぐに落ち着きを取り戻す。

「鈴奈庵？幻想郷縁起？なんだそれは…」

「…里の中心から少し外れた場所に、貸本屋がある。それが鈴奈庵だ。そして、その鈴奈庵に幻想郷縁起という書物がある」

「その幻想郷縁起というものは、この場所について書いてあるのか？」
「そうだ。私も授業をする上で参考にしていたりする」

「…そんなものがあるなら先に言ってくれ。」

そんな心情を隠しきれなかったのか、気の抜けた表情で○○はため息をついた。無駄足であった。慧音が里の外に出る事には消極的であったのに、こういつた事情があつたのだろう。この事を知っていれば、確かに里から出る必要なんてない。

「早速行つてみるよ。ありがとう、慧音」

「助けになつたようでありよりだ。これから里の外には…」
慧音の長い説法が始まつた頃には、○○は駆け出していた。

得体の知れない同居人の手前、○○は合点がいった、という振りをしていた。だが実の所、彼はその書物を信用していない。…というよりそもそも慧音を信用していない。

何がその書物を書いたかも知らない上に、その存在が何らかの影響を受けているか、故意的に情報を隠蔽していたりする可能性があるからだ。

それらを考慮した結果、○○は実際に調査しなければならぬと考えていた。問題は山積みだが。

主な課題は、やはり補給を受けられないことだった。それに矢田寺の話によると、今まで遭遇したものは比喩にならない程に脅威度が高い敵対実体がここには掃いて捨てるほど存在しているという。この二つが大きな課題である。

それに対して、○○は財団との通信を確立できてない以上、彼らの頭脳やアーティラリーなどを利用する事は土台不可能である。非対称的な関係であった。

だが諦めるわけにもいかない。○○はそれだけは認めることができなかつた。

■

走っていた○○が”鈴奈庵”と書かれた表札を見付けて中に入ると、そこは少々カビ臭く暗い空気が充満した店だった。

「何かお探ですか？」

そんな空間の奥から声が響いた。店に入った○○に近付いてきた声の主は猫背の男であった。最近成人した青年といった容貌で、こやかに笑っている。

「…幻想郷縁起という本はあるか？」

「幻想郷縁起ですか？ありますけど…」

「その本、貸し出しはしているか？」

「ええ、少々お待ちください」

そう言うと、彼は…店主は再び店の奥へと引つ込む。暫くすると、分厚い書籍を抱えて持って来た。

「これを貸し出すのは貴方が初めてですよ。皆、ここの歴史に興味がないものですから…」

寂しそうな表情で、店主は本の表紙を撫でる。

「料金は幾らだ？」

「ええと、これくらいですね」

提示された金額は想定していたよりも安価だった。

「随分と安いんだな」

「ええまあ、著者の方の要望もありますので…」

「著者？」

「稗田様ですよ。御阿礼の方です」

■ 右腕で抱えた書籍のずっしりとした重量を感じつつ、○○は帰路へとついていた。そろそろ日が暮れる為に、急ぎながら。

「あの」

小さな声だった。

「はい？」

だがとても透き通った…よく通る声であった。だから○○の耳に小さくとも、はつきりと届いたのだ。

「その本、借りたのですか？」

「ええ、まあ…」

○○が声の方に振り返ると、そこには少女が居た。彼が普段目にしている服よりも上質なものを身に付けた少女は、自慢げな表情で言葉を続けた。

「ふふ、ちゃんと読むですよ？」

それだけ言うと、少女は上機嫌に去っていった。

急に話し掛けられ、そして相手が急に去っていった為に、置いてけぼりにされた○○を残して。

一体あれはなんだったのか。○○は今さつき遭遇した不思議な少女について考えていた。なにやらいきなり話し掛けてきたと思ったら、直ぐにその場を後にした謎の少女。

…一体何者なのだろうか？

その答えは近く明らかになることになるが、今の○○には知る由もない。

■ 自室に戻り、文机に本を置いた○○は、改めて幻想郷縁起を観察する。肌触りの良い表紙に指を滑らせながら、店主の言葉を思い出す。「稗田様が代々書き上げているこの幻想郷縁起は、妖怪に対する対処法や、この幻想郷の成り立ちについて書き記しています。ですが、皆はそれを読もうとしません。私はそれが残念でならない」

”幻想郷”

○○は初めて聞く単語であった為に店主に詳細を聞いたところ、この場所がこの場所である由縁であるとの説明を受けた。

それを重要な単語だと思った○○は、この言葉を頭の片隅に留め置く事にした。

「…っ！」

内容に目を通した瞬間に、致命的な事実には彼は気付いてしまった。すぐに本を閉じ、寝転がる。

「読めないんだが」